

パーソンズ・ルーマン・ハバーマスの 象徴的メディア論註解

—社会システムにおける集権化と分権化（その4）—

碓 井 崧

Symbolisch generalisierte Kommunikationsmedien :
Parsons, Luhmann und Habermas

Takashi USUI

要旨 パーソンズ・ルーマン・ハバーマスの三者は、ともに「象徴的メディア」を扱う共通アリーナにあるので、それぞれの長短を比較・検討することができる。「象徴的」「一般化」「コミュニケーション・メディア」「成果」「操作」という中心概念を置き、三者には、メディアそのものを複雑性縮減、負担解除の装置としてとらえる共通項がある。他方、メディアが生み出す多様性に差がないかどうかを検討する。メディアの記号論、名称、類別、機能と効果、社会分化との関連を、順次検討した。批判的検討を通して、基本的メディア、技術的メディア、個別領域・複合形態でのメディア、の3領域に分けて再編成する可能性を示唆した。メディアと集権化・分権化の関連について問題提起をした。テキストとして、パーソンズ『政治と社会構造』、ハバーマス『コミュニケーション的行為の理論』、ルーマン『社会の社会』を中心にしている。

分権化とネットワーク化を、規格化と多様化の観点から基礎づける作業をすすめてきた¹。本稿では、メディア論における規格化・多様化問題を検討する。パーソンズ・ルーマン・ハバーマスにおけるメディア論のテキストの比較を試みながら、文字通りの註解というわけではないが、メディアの理論の再構成をする糸口を見いだすことを課題とする。2項で見るように、三者それぞれ名称を若干異にしているので、以下、必要な場合には、共通用語として「象徴的メディア」を用いる。

ハバーマス＝ルーマンの両者については、「論争」以降の主著の検討をするが、パーソンズを加え、三者が出揃って共通問題になっている象徴的メディア論を検討する。ハバーマス＝ルーマンの主著を検討することによって、両者の社会学的分析での具体的有効性・妥当性が一層明らかになるとともに、論争の相手方の観点も取り込み、メディアのとらえかたでの共通点のあることも想定して検討しよう。

パーソンズ、ルーマン、ハバーマスのそれぞれの理論背景があつてのことだが、「象徴的」「一般化」「コミュニケーション・メディア」という中心概念を置いている。パーソン

ズにはじまる、メディアという共通項での議論を比較・検討しよう。いわば三つどもえの観を呈し、三者を比較するとともに、対立点を越えて新たなメディア論の糸口を見いだしていきたい。

象徴的メディアの議論では、三者とも、メディアそのものは、多様な複雑性を縮減する装置としてとらえている点に共通項がある。他方、メディア（媒体）が多様性を生み出す観点での三者の差がないかどうかの点を検討していく。

以下の検討の主要テキストとしては、パーソンズの場合、主として『政治と社会構造』のメディア論をとりあげる。ハバーマスが、パーソンズのメディア論を全般的に検討を加えているので、両者の比較という意味もあって、かれのパーソンズ説の要約・検討も参照する。ハバーマスのテキストとしては、『コミュニケーション的行為の理論』、とくに、「第7章 タルコット・パーソンズ、第2節（3）制御メディアの理論」を中心にした議論をみる。ルーマンの場合、『社会システム』までのメディア論が、『社会の社会』という晩年の成果において、「象徴的に一般化されたコミュニケーション・メディア」として、体系的に集中して論じられている所説を参照する。

引用の凡例 以下本論での注の表記では、特に断らない限り、パーソンズ『政治と社会構造』（邦訳上下、全2巻）、ハバーマス『コミュニケーション的行為の理論』（原本1、2の全2巻、邦訳、上中下の全3巻）、ルーマン『社会の社会』（原本1、2の全2巻）からのものである。括弧の中は、対応する邦訳の頁。

- 1 文化多様性と文化混沌（碓井、2000年）、条件プログラムと目的プログラム（碓井、1999年）についての検討をすすめてきた。

1 記号論とメディア論

パーソンズ（Talcott Parsons）は、人類学的言語理論に依拠し、また、文化システムを見る場合、ヤコブソン＝ハレ（Roman Jakobson & Morris Halle）の言語学の学説整理に依拠している¹。共通言語のメディアによって、規範的秩序化に対して重要な価値合意が担われる²とみなしている。しかし、未開社会ならともかく、この見方は、高度に分化した近代社会での妥当性には疑問が出てくる。

これに対し、ルーマン、ハバーマスの双方は、20世紀の言語学の展開（言語論的転回）を踏まえている点で、それがメディア論を考える上にも影響を及ぼしている。

ルーマン（Niklas Luhmann）は、とくに意味論（Semantik）を主眼にしている。意味は差異により、メディアとは差異の橋渡しをするものである³。ルーマンは、記号にかかわる意味の問題を、統一につながるsymbolischな面と、新しい差異につながるdiabolischの両面においてとらえる⁴。ルーマンではゼマンティークという研究分野は、独自の

領域をなしている。

ハバーマス (Jürgen Habermas) は、語用論 (Pragmatik) を独自に展開し、普遍的語用論の立場をとっている。すなわち、オースティン (John L. Austin) の用語によりながら、ハバーマスのいう操作メディアは、聞き手側に引き起こされる「発語媒介」行為の効果、またハバーマスのいう一般化されたコミュニケーション形式は、「発語内」行為を必要とする、というように、メディアと言語、行為との関係は密接に関連づけられている⁵。このようにコミュニケーションが中心になり、ハバーマス・ルーマンの「論争」での、モノログかダイアログか、とのハバーマスの対決姿勢も、簡単には済まない⁶。ルーマンが言語記号の同一化作用と差異化作用の両面を指摘しているのに対し、ハバーマスは言語による了解・合意の同一化 (アイデンティティ) 作用により強調点がある。

1 Roman Jakobson & Morris Halle, *Fundamentals of Language*, 1956, (Parsons et al. eds., *Theories of Society*, pp. 971-976. 丸山哲央訳『文化システム論』50頁以下)。パーソンズ、邦訳、下140-141頁。ここでパーソンズは、言語をまずは意味論的に位置づけている。

2 パーソンズについてのハバーマスの指摘, Habermas, 2-388 (下222頁)。

3 Luhmann, 1-319.

4 Luhmann, 1-320.

5 Habermas, 1-377, 385-397, 2-416-417 (中14, 22-34頁, 下250頁)。「発語媒介」(perlokutionär), 「発語内」(illokutionär)のうち、後者には、説得、訓戒を含める。

6 「論争」では、著者のだれも「社会テクノロジー」を扱ったわけではなかった、とルーマンは振り返る。Luhmann, 1-11.

2 メディアの名称

さて、このメディアの名称としては、パーソンズの場合、「一般化された象徴的媒体」、あるいは、「相互交換のメディア」(media of exchange)と呼ばれている¹。これを継承してルーマンの場合には、「象徴的に一般化されたコミュニケーション・メディア」(symbolisch generalisierte Kommunikationsmedien, 以下「象徴的メディア」と略称することにする)というのが標準的名称として用いられ、成果をより確実にしうという観点から、時に「成果メディア」(Erfolgsmedien)とも言われ²、かれのいう「拡大メディア」(Verbreitungsmedien)の議論につながる。

ハバーマスの場合には、パーソンズを批判的に摂取、組み替えて、一方に、「制御メディア」(Steuerungsmedien)、他方に「一般化されたコミュニケーション形式」(Formen generalisierter Kommunikation, 以下、「形式」と略称することにする)³と呼んで区別する。前者は、戦略的-成果志向的 (erfolgsorientiert)、後者は、相互了解志向 (verständigungsorientiert) のものである⁴。広義にメディアと総称しつつ、とくに狭義の場

合に「形式」と称し「メディア」と言わないのは、言語活動そのものと解し、メディアにまで成熟していないという観点からであろう。ハバーマスの場合、メディア 即 制御メディアということで、制御メディア以外のメディアを認めないということになるという問題が残される。

これらに共通の「象徴的」「一般化」という点に関し、〈象徴的〉というのは、自己・他者の差異をつなぐ社会的 (sozial) 次元、〈一般化された〉というのは、状況の差異をこえて妥当する事象的 (sachlich) 次元という、そして、とくに「一般化」というのは選択と動機づけとの関連が成立していることをいう、ルーマンの意味次元の区別に依ることができる⁵。

なお、ルーマン、ハバーマスが、ともに、成果 (Erfolg) をキーワードの1つとして使っているものの、コミュニケーション成果なのか、目的-手段の戦略的成果なのか、まったく含意を異にしていることに注意する必要がある。

- 1 パーソンズは、各所で、「象徴的媒体」「一般化された媒体」「一般化された象徴的媒体」「一般化された交換メディア」という名称を用いている。パーソンズ、邦訳、下40-、152、169、198、275頁など。Luhmann, 1-318でも指摘されている。
- 2 Luhmann, 1-203.
- 3 場合によっては、Generalisierte Formen der Kommunikationという同趣旨の表現もある。Habermas, 2-416-417 (下250頁)。
- 4 Habermas, 2-413-419 (下247-254頁)。パーソンズのサンクションという概念が、「批判可能な妥当要求」に対するイエースかノーかの態度決定には通用しえない、との批判を手掛かりにこの議論を展開している。
- 5 Luhmann, 1-318; Luhmann, 1984, S. 222 (邦訳、上254頁)

3 メディアの類別

さて、このような名称のもとで、三者はメディアをどのように類別しているだろうか。この点でも、やはり、パーソンズが原型になるものを提示している。それは、貨幣 (money)、権力 (power)、影響力 (influence)、コミットメント (commitment) であり、これらのメディアは、この順に、A (経済)、G (政治)、I (社会)、L (文化) という下位システムに直接対応するとともに、下位システム間の交換のメディアになっている¹ (図1)。例えば、AとGの間にあって、貨幣メディアは、(AからGへの) 生産力のコントロール、(GからAへの) 流動的資源の配分という形で資源動員システムになっている。

ルーマンの場合、パーソンズの影響をうけつつ、メディアは4つにとどまることなく、無数に展開しうる糸口を提示している。『社会の社会』では、貨幣、法、愛、真理などを、

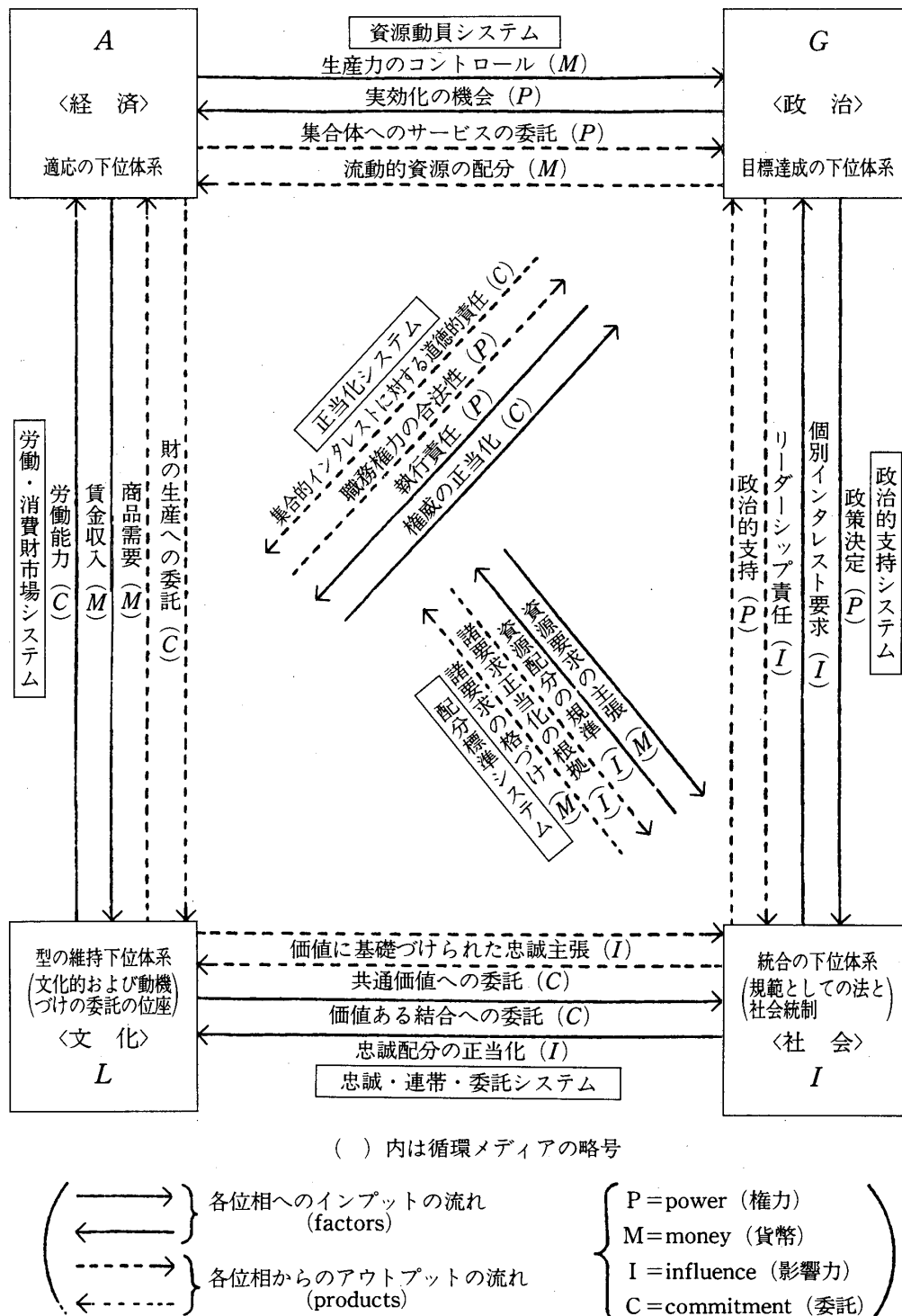


図1 パーソンズの社会の相互交換図式

[Sociological Theory 1967 ; pp. 348, 350] [Politics 1969 ; pp. 398, 399 : 下125, 127頁] からの合成.

新睦人, 社会分析図式の形成と展開, 田野崎昭夫編『パーソンズの社会理論』誠信書房, 1975年, 88頁.

主なメディアとしており、「象徴的メディア」の境界づけ (Markierung) としては、他我 (Alter) と自我 (Ego) の関連、帰責 (Zurechnung) としては行為 (Handeln) と体験 (Erleben) の関連を区別している。この場合、「行為」とはシステムそのものに帰責され、「体験」とは環境 (Umwelt) に帰責されるという区分によるものである。「象徴的メディア」は、自己、他者の地位の関連

表1 ルーマンの「象徴的に一般化されたコミュニケーション・メディア」

自我 他我	体 験	行 為
体 験	Ae→Ee 真理 価値	Ae→Eh 愛
行 為	Ah→Ee 所有権・貨幣 芸術	Ah→Eh 権力・法

(Luhmann, 1-336)

表2 社会システムのレベルでの制御メディア

構成要素 メディア	標準状況	一般化された価値	名 義 的 要 求	合 理 性 の 基 準	行為者の 態 度	現 実 の 価 値	担 保	制 度 化 の 形 態
貨 幣	交 換	効 用	交換価値	収 益	成 果 的 志 向	使用価値	金	所有権と 契 約
権 力	指 示	有 効 性	拘束的な 意思決定	効 率 (主 権)	成 果 的 志 向	集合的目 標の実現	強制手段	官僚組織
影 響 力	教 化	忠 誠 心	権威的宣言 (告知・解 釈・所見)	同 意	了 解 的 志 向	信念につ いての基 礎づけ	文化的伝承 と社会的生 活形態	威光序列
価値拘束	道 徳 的 アピール	完 全 性	権威的戒め (批判と勇 気づけ)	「パターン の一貫性」	了 解 的 志 向	義 務 の 正 当 化	内面化され た価値、内 面的サンク シ ョ ン	道 徳 的 導 引

(Habermas, 2-409)

で、体験的 (erlebend) なものとして前提されているか、行為的 (handelnd) なものとして前提されているかによって区別される²。すなわち、貨幣は (Ah→Ee)、法は (Ah→Eh)、愛は (Ae→Eh)、真理は (Ae→Ee) などの表記をしている (表1)³。例えば、貨幣であれば、「他私の行為」 (Ah) が「自我の体験」 (Ee) として受けとめられることを示している。以下、無数のメディアのリストが成り立ちうる。

ルーマンとは異なり、ハーバーマスは、むしろ、パーソンズの4メディアそのものを、自己の議論の中に引き込み、精密化して、先の「操作メディア」、「形式」の2つに組み替えようとする⁴ (表2)。貨幣と権力は「操作メディア」に、影響力と価値拘束は「形式」に分けられ、前者は経験的に (empirisch) 動機づけられ、後者は合理的に (rational) ⁵動機づけられた連関になっている。「操作メディア」は、言語活動そのものではなく、他のものへと「代置」 (ersetzen) している場合である。「形式」は言語活動が、「凝縮」 (kondensieren) する場合で、言語活動そのものの一特殊ケースである⁶。このことは、言語と貨幣との比較に端的に示されている。このように、両者の間には截然と分割線が引かれる。

「形式」の中に含められるものとして、認知的・手段的知識 (Wissen)、道徳的見解 (moralische Einsicht)、審美的判断力 (ästhetisch Urteilkraft) が考えられている⁷。ハバーマスの立場からすると、パーソンズは矛盾したものをひとくくりにまとめたメディア二元論 (Mediendualismus) に陥っている⁸、との批判的立場からの新たな試みである。

以下の整理に随時関連するので、影響力と価値拘束に関する、ハバーマスの総括テーゼを以下に引いておく⁹。

影響力と価値拘束 (ハバーマスのテーゼ)

この考察から私は、次のテーゼを導き出す。すなわち、影響力と価値拘束は、たしかに一般化されたコミュニケーションの形式を示し、その限りで〈解釈経費〉と〈相互了解リスク〉双方の節約をもたらすが、しかし、その際、この負担免除の効果は、貨幣や権力とは異った方法で達成される、というテーゼである。影響力と価値拘束によって相互行為が、共有された文化的知識、妥当する規範、帰責可能な動機づけ、という生活世界的文脈から切り離されることはありえない。というのは、それらは、言語による合意形成という資源を利用せざるをえないからである。このことによって同時に説明されるのは、影響力と価値拘束の場合、生活世界に対する特別な制度的フィードバックが必要とされないその理由である。影響力と価値拘束が、「同意」と「相互了解の失敗」という二者択一に対し、中立的であることはきわめて少ない。むしろそれらは、連帯性 (Solidarität) と完結性 (Integrität) を、合意——認知的妥当要求および規範的妥当要求に対する間主観的な承認に依拠する合意——の二つのケースとして、「一般化された価値」generalisierter Wertへと高める。それらは、貨幣メディアや権力メディアとは異なり、行為の相互調整機能に関して、言語に「代置する」ersetzenことはできない。それらがなशるのは、抽象化作用によって、言語に生活世界の複雑性から生ずる「負担を免除する」entlastenだけである。一つの文章で表現すれば、この種のメディアは、生活世界を技術化することはできない。

Habermas, 2-412 (下246-247頁)。一部、訳を補正し、強調表記があるが、その区別は省略した。

1 パーソンズについての、ハバーマスの対応、パーソンズのAGILと4メディアとの対応については、Habermas, 2-385ff. (下219頁以下)。

2 Luhmann, 1-335。他にも、Luhmann, 1984, SS.123-124 (上129頁)。

ルーマンは、この行為と体験、自我と他我を組み合わせた4セルについて、1)「行為理論」とは異なり、「客観的」行為概念を用いるわけではない。第一水準の観察で、行為が対象として体験されたり行為されたりするということを前提としている。これは、行為が自由に選択されねばならないという「主観的」行為概念とも矛盾するものでもない。行為理論家に拡がっている疑念に反論して言えば、第一水準から第二水準への移行によって、失われるものは何もなく、より複雑になってはいても、より構造化された言語で、すべてが再構築されるのである。2) このタイプ分けそのものは、日常知をあらわしているのでもなく、諸現象の完全な分類を問題にしているわけでもない、と断っている (Luhmann, 1-335, 同所の注記も参照)。

3 「愛」はメディアとしては、絶望的にメタファーにとどまっている。と言うのも、信頼性、身体的魅力、性的魅力は、公然とは資源に転化しえないからである、とハバーマスが言うが (Habermas, 2-418. 下252頁)、これはルーマンを批判しているものと思われる。両者のメ

ディア論では、相互の取り入れと相互批判が交錯する場合が見られるが、その一例である。

- 4 Habermas, 2-413, 419 (下247, 254頁). パーソンのダブル・コンティンジェンシーから相互了解に至る道筋と、ハバーマスの「批判可能な妥当性要求」の相互主観的な承認との間には、共通問題があるという認識では歩み寄りがある (Habermas, 2-392, 下225-226頁).
- 5 「操作メディア」が、誘因と威嚇を基礎にしているのに対し、「形式」は合意にかかわる点で「合理的」に動機づけられている、とする (Habermas, 2-184, 198, 417, 下19, 232, 251頁). 「形式」とメディアとの関係づけについては, Habermas, 2-408 (下242-244頁).
- 6 Habermas, 2-269-270, 398, 412 (下103, 232, 246-247頁).
- 7 Habermas, 2-418 (下253頁).
- 8 Habermas, 2-419 (下254頁).
- 9 Habermas, 2-412 (下246-247頁).

4 メディアの機能と効果

類別の基礎には、機能と効果のとらえかたがある。

パーソンズの場合は、コードがもつ規範的意味に関心があり、分有された象徴的価値としてメディアの機能がとらえられていた。コードを介して、下位システム間のインプット-アウトプットの境界相互交換の機能、循環メディアである点が重視された。

ルーマンの場合には、メディアは不確実性問題に対処し、多様性に由来するコンフリクトを回避し、コミュニケーションの採択される可能性がより期待されることに関連づける¹。言い換えると、言語コードの意味提案の採択 (Annahme eines Sinnvorschlages) が繰り返される確度を高め、意味提案のチャンスが増大することである。これによって、受容意味がより多く受け入れられ、正のゼマンティーク (positive Semantik) となる。メディアの「一般化」という表現で、「選択」と「動機づけ」が関連づけられ、統一単位になる側面が強調される²。ついで、かれは、メディアと道徳 (Moral) とは、「もっともらしさ」 (Plausibilität) から、より確実性に接近する仕組みとして、機能的に等価である、という³。

ハバーマスの場合は、種々の「効果」として言及していることが、他の二者の機能に相当するとみなして、ここでとりあげよう。貨幣と資本主義システムの成立との関連で、貨幣のシステム形成効果 (systembildende Effekt)⁴を認める。権力についても、システム効果 (Systemeffekte) にふれ、これには集合的目標の達成という一般化された「使用価値」⁵があるとする。パーソンズの4下位システムのI Lに相当するところは、操作メディアでなく、「形式」とされる。影響力の威信秩序をみとめ、影響力の一般化は、メディア形成効果 (medienbildende Effekt)、尊敬の一般化としての地位システムをつくる構造形成効果 (strukturbildende Effekt) がある⁶。価値拘束は、「道徳的指導 (権威)」の問題である⁷。また、ハバーマスにも、「一般化された・採択の用意」 (generalisierte Annah-

mebereitschaft) と、ルーマンの「象徴的に一般化されたコミュニケーション・メディア」での不確実性の縮減と、類似表現のあることも注目される⁸。ハバーマスは、「近代では前近代社会に比べて、威信、道德の地位ははるかに低い」という、パーソンズの解釈を取り入れて⁹、上述の二大区分をしている。

1 Luhmann, 1-316-317.

2 Luhmann, 1984, SS.206-207, 222.

3 道德が統一化へと、「象徴的メディア」が個別問題ごとの特化という違いはある。Luhmann, 1-317.

4 Habermas, 2-399 (下232頁).

5 Habermas, 2-401-403 (下235-237頁).

6 Habermas, 2-270, 408-410, 417-419 (下103, 243, 251-253). 「メディア形成効果」というのは、肉体的強さの場合のように、メディアへと形態変換し、権力に転化しうる。Habermas, 2-417-418 (下252頁). このような指摘をしている点では、「操作メディア」「形式」の二分化が全く断絶しているというわけではない。

7 Habermas, 2-410-411 (下243-245頁). 他のメディアの場合のように、特段の「効果」という強調はなされていない。

8 Habermas, 2-271, Fig. 27 (下104頁).

9 Habermas, 2-410 (下244頁).

5 近代の社会分化とメディア

以上のメディア論の基礎には、各々の社会システム論、システム観がある。

パーソンズの場合、社会システムは、当初、役割システムとして、パーソナリティ・システム、文化システムとは対照的にとらえられていた。AGIL図式では、下位の社会システムとの境界相互交換としてとらえられている(図1)。『近代社会の体系』においては、AGILのうちの、I (Integration) にあたる社会的コミュニティ (societal community) をもって、社会システムとみなし、役割システムはA次元に移されている。このように、学説の時期ごとの違いはあるが、社会システム論としては、環境適応と機能的統合を重視した立場と言える¹。

これに対して、ルーマンの場合は、自己言及性、自己組織化を原点にすえている点で、パーソンズとは方向を異にしている。かれの場合、社会システムは、コミュニケーション・システム (Kommunikationssystem) ²であると定義して、そのためメディア論は、とくに重要な位置を占めることになる。かれは、社会分化の進行は、環節的分化、成層的分化、機能的分化の段階を踏み、多元的な機能的分化では、政治・経済・文化など諸部門がそれぞれ機能的に自律化するアウトポイエーシスの観点を強調している³。

メディア論としては、かれのシステム史とメディア史⁴の関連づけが注目される。シス

テムは、集権階統システム (hierarchisch システム) から、異種化ネットワークシステム (heterarchisch システム) へと展開してきた。これに対し、拡大メディア (文字、印刷術から、テレビ、電子メディアまで) は、前者のシステムを形成し支える一方、その根っこを解体させる働きをもしている。後者のシステムは、ネットワーク化 (Vernetzung) に直接依存する。これは、その時々でのコンタクトである。「脱中心的」で、社会的オペレーションの空間的統合を断念するにいたる。集権階統システムでは、トップが自己の意志を貫徹する。拡大メディアの歴史は、これを基盤にしてきた。しかし、このメディアは、ハイアラーキー形成と平行に、ハイアラーキーの「正当性喪失」のメディアでもあった。同時に平行して、代替のプログラムにも従事してきたとみなされる。

ハバーマスの場合は、システム統合 (Systemintegration) と社会統合 (Sozialintegration) の二元的ダイナミズムで考えるのが一つの筋道になっている。ハバーマスの、社会統合の概念戦略は、コミュニケーション的行為から出発し、社会を生活世界として構成するものであるが、これに対し、システム統合の概念戦略は、社会を自己制御システムというモデルとして表象する⁵、ともいう。階統的社会と垂直的分化、市場経済と近代行政⁶とともに、システム統合の分出、操作メディアの出現と作用がみられるようになる。社会統合に対応する生活世界の再生産は、言語的メディアを介して、1 文化の再生産、2 統合、3 社会化⁷の三メカニズムによってなされる。かれのいう「生活世界の内的植民地化」⁸では、システム統合による生活世界への介入・強制・隷属・駆逐をもたらしている。先の貨幣・権力という二つの操作メディアは、生活世界と経済・行政の間の交換のメディアとしても、位置づけられている⁹。

メディア形態の展開 (ルーマン)

ルーマンの場合、メディアを、進化の観点から、次のように定義しているので、ここで補説しておこう。コミュニケーションの破損箇所にあてがわれ、不確実なものを確実なものに変換させることに、機能上精確に役立つ進化上の獲得物を「メディア」(Medien)と呼んでいる。

コミュニケーションでは、それぞれの人間は、何を認知するかを一人で選り分け (選択し)、処理している。コミュニケーションは相互調整された選択性であり、情報処理なのである。コミュニケーションのメディアは、その三つの不確実さに対応して、三つの形態が区別される (これらは、順次前のものを基礎にし、重なって出現してくる)。

- 1) 第一のメディアは、〈言語〉であり、記号を用いることを特徴としている。これは、第一の不確実性、すなわち、自我は他我が何を考えているかを、そもそも〈理解〉することが不確実であることに対応する。
- 2) 第二は、コミュニケーションを拡大する〈拡大メディア〉、すなわち、文字、印刷、放送がある。これは、第二の不確実性、すなわち時空間の広がりの中で、受け手に送り手からのコミュニケーションが〈到達〉するかどうかの不確実であることに対応している。
- 3) 第三は、〈シンボリックに一般化されたコミュニケーション・メディア〉であり、本稿でもとりあげた、真理、愛、貨幣、権力、あるいは、宗教的信念、芸術、〈基本的価値〉を加えることもできる。ここでは、選択と動機づけが関連づけられ、統一単位になるように「一般化」が

なされている。これは、第三の不確実性、すなわちコミュニケーションの成果があがるかどうかの不確実性に対応している。 Luhmann, 1984, SS.220-225, 邦訳, 上, 252-257頁。村中知子 (1996年), 180-181頁も参照。

- 1 Habermas, 2-362 (下198頁), ハバーマスがパーソンズのメディアを制御メディアと解する見解については, Habermas, 2-384-419, besonders, 409 (下218頁以下, 244頁の一覧表)。
- 2 例えば, Luhmann, 1984, S.197 (下221頁)。
- 3 クニール, G. ナセヒ, A., 邦訳, 1995年, 154-167頁参照。
- 4 Luhmann, 1-312-315, 「拡大メディア: 総括」においてまとめられている。
- 5 社会統合を生活世界とするのに対し, システム統合は, 社会を「自己制御システム」(ein selbstgesteuertes System) というモデルの概念戦略になる。Habermas, 2-226-227 (下60-61頁)。マルクスは, システム統合の問題から, ウェーバーは, 社会統合の問題から出発した (Habermas, 2-463, 下301頁)。市民社会において, 社会的に統合された行為領域 (生活世界, 私的領域と公共性領域) は, システム統合された行為領域 (経済と国家) に対して, 相互補完的に関連しあっている (Habermas, 2-471-474, 下309-310頁)。
- 6 Habermas, 2-246-249 (下82-84頁)。
- 7 Habermas, 2-208-209, 212-217 (下44, 48-51頁)。
- 8 植民地化 (Kolonisierung) 以外に, システム統合と社会統合との分断 (die Entkopplung von System- und Sozialintegration), 生活世界の隷属化 (Mediatisierung der Lebenswelt) ともいう。Habermas, 2-277-278, 293, 470-471 (下110-111, 125, 308-309頁)。
- 9 Habermas, 2-471-474 (下308-313頁)。

6 メディアと負担解除・複雑性縮減

メディアの果たす複雑性の縮減の問題については, 三者の間での大筋の一致が見られる。

パーソンズの場合, メディアがコンティンジェンシー (偶発性) を解消するメカニズムに, 複雑性縮減を認めることができる¹。コンティンジェントな, 自我と他者の間の二者関係の「成果達成」は, サンクションとメディアの複合した組み合わせで説明される。1) 他者にとって「状況」が有利か不利かの問題と, 2) 他者が自我に従うことの善し悪しの理由提示をして, 他者の「意図」を動かすという問題, の二基準 (二チャンネル), さらに, 正負のサンクションの基準とも組合わされて, 次の4タイプになることが示されている。

1) 正のサンクションの誘因 (inducement) モードと貨幣メディア, 2) 負の制止 (deterrence) モードと権力メディア, 3) 負の「コミットメントの活性化」(activation of commitment) モードと「コミットメントの一般化」のメディア, 4) 正の説得 (persuasion) モードと影響力メディア, 以上の4つである。これら一群のメディアは, 言語コミュニケーションの場合よりも, はるかに特定のであるととも、より一般化されている, と言う。

ルーマンの複雑性の縮減 (Komplexitätsreduktion) は、社会システムそのものについての周知の命題であるが、ここではかれの「象徴的メディア」にも、そのままあてはめることができる。「象徴的メディア」は、多様性のコンフリクトを回避し、コードの含む「ノー」Neinの機会を減らすことによって、複雑性を縮減している²。

ハバーマスも、以上の複雑性縮減の発想を取り入れているが、パーソンズ修正の上記二分法と関連し、独自に展開している。メディアは、行為をコーディネートしている。第1は、操作メディアに対応し、言語的相互了解から脱言語的 (entsprachlich) な、別のものに「代置」される (ersetzen) ような負担解除がある。第2は、「形式」に対応し、過度な複雑性からの単純化であり、相互了解の「凝縮」 (kondensieren) した場合の負担解除である。これらは、2種の負担解除である³ (第3節のハバーマス・テーゼ、参照)。後者の操作メディアでない場合についても、「コミュニケーションの浪費とリスクの負担解除」 (Entlastung von Kommunikationsaufwand und -risiko) ⁴という指摘をしている。

コメントしておこう。「代置」というのは、マートンの機能的等価の観点から検討の余地はないだろうか。また、負担解除という説明は、技術化とは言えないだろうか。ハバーマスは、成果志向と関連づけることによって、「生活の技術化」を批判する立場にあるが、負担解除そのものが、技術化と解釈されるのではないだろうか。複雑性の縮減は、負担解除の一形態であり、負担解除という発想は、従来とも言われて来たことであるが、このアイデアを、メディア論に適用しているところに、三者の共通認識が集まっている点に、注目すべきであろう。

このように概観してみると、三者にはコミュニケーションに関して、負担解除・複雑性縮減にかかわる共通の発想のあることが分かる。この点を、ハバーマスのように、「代置」か「凝縮」か、と言語との関連で厳密に区別する発想したいは重要であろう。また、ルーマンのように、「象徴的シンボル」をもって秩序問題解決につなげる⁵のも、重要な提案と言えよう。

1 Parsons, *Sociological Theory and Modern Society*, 1967, pp.361-366; パーソンズ, 邦訳, 1974年, 下巻, 149頁. Habermas, 2-394, 413-414 (下228, 247-248頁).

2 Luhmann, 1-316-317.

3 Habermas, 2-269, 397, 413 (下102, 228, 247頁). ハバーマスは、ルーマンの「生活世界の技術化」を「脱言語化したメディア」と解している。

4 Habermas, 2-418 (下252頁).

5 ルーマンにおいては、パーソンズのホブズの秩序問題の問いのたて方ではなく、秩序の問いは、社会的なものに関する理論のさまざまな部分に分配されなければならない、と言う。ルーマン, 邦訳, 1985年, 163頁。

7 批判的検討

パーソンズが、「一般化された象徴的メディア」論の原型をつくった貢献は大きい。他方、ハバーマスによれば、パーソンズの場合、二種のメディアが混在していて、サンクション図式の、I L次元への適用が難しく、四分化を貫徹できないでいる¹という内在批判が加えられている。また、パーソンズが過度の一般化²に陥り、A G I L カテゴリーが、超越的秩序化、健康などの人間の基本構成にまで及んでいる点を問題にしている。

ルーマンは、メディアのリストを、4領域で代表させつつ、メディアの多様性への道を開いている。併せて、かれは、宗教や価値など個々の項目が象徴的メディアになりうるのかどうかの厳密な吟味、象徴的メディアを必要としない領域の検討も行っている。メディア史の中では、拡大メディアでのネットワーク、電腦社会論がとりあげられている。ルーマンの場合、コミュニケーションの成立要件が核なので、ハバーマスの場合の討議と合意に関連づけることによって、両者の接点も明らかになる可能性を秘めている。シンボル・言語について、ルーマンの場合、統一のsymbolischな面と、差異と分離のdiabolischな面が指摘されていて、ハバーマスほどには言語に信賴的ではない面が浮かび上ってくる。これらは、新たな検討課題になりうるが、ここではとりあげない。パーソンズのシステム論が、スメルサー、ベラーの実証研究を誘発しているのに対し、ルーマンの社会システム論には限界があるのかもしれない。一般システム理論をふまえて、社会システム論に与えた影響は大きい。しかし、ルーマン理論は、とりあえず社会システムの生成、あるいは社会過程論での新しいパラダイムの提案として、また、コミュニケーションとメディア研究として位置づける方が適切かもしれない。

ハバーマスは、言語を基礎に、脱言語化の側面もととりあげ、討議と「批判可能な妥当性要求」の要因をみて、よりダイナミックな行為主体をすえることに成功している。権力、貨幣をもって操作メディアとするが、操作(Steuerung)、自己制御(Selbststeuerung)、技術化(Technisierung)の諸概念に過剰に意味を込めすぎて、現代の多様なメディア世界を分析する上で、動きがとれなくなっているのではないだろうか。

第1は、Steuerung概念——英語のcontrolとしての制御——は、今日のシステム論、サイバネティック思考の背景のもと、ナショルト(F.Naschold)のいうSteuerungからRegelungへの転換による民主的フィードバックの議論、あるいはベンツ(A.Benz)における生活世界に即した分権的意思決定の場合も含み得る³。また、パーソンズの場合にも、G—I次元間での相互交換で、政治的支持がモデルとして組み込まれていた⁴。これらを強制・操縦のSteuerungとしてのみ、ラベルはりができるかどうか、という問題が残る。先述のように、ハバーマスは、ルーマンが「生活世界の技術化」と言っている側面を、Steuerungに読み替えようとする。この場合、「技術化」とは、目的合理的行為の増大、リスク回避⁵とされ、負担解除のことであった。自己制御をシステム統合にもっぱら関連づ

けるため、生活世界での民主的なフィードバックの観点が入りにくくなっている。ハバーマスは、公共性とメディア技術の関係をとりあげている⁶。今日、電子民主主義が問題になる場合⁷、先の技術化、Steuerungの観点とも関連し、現実分析には弾力性を欠くのではないかとの懸念が残る。メディアの技術的特性そのものを、別個にたどる試みも必要になる。

第2に、貨幣の問題は、Steuerungのメディアとしてのみ見ることには限界がある。市場メカニズムの中心にあるのが貨幣だとすると、貨幣の役割は自由選択の交換メディアとして、多様性の一環になっている。貨幣がもつ流動性について、ルーマンは、取引時点で固定された価格が、次の時点では、たちまち変化するという変動特性をあげ、これは、他のメディアには見られない特性だとする⁸。メディアと自由選択・多様性の関連を展開をするためには、まずは、貨幣の役割の確認が出発点になるのだろう。

- 1 Habermas, 2-413-417 (下247-251頁).
- 2 Habermas, 2-407-412 (下241-247頁).
- 3 Naschold (1969). 碓井 (1978年) でのナショルトを参照。ベンツについては、碓井 (1995年) を参照。
- 4 パーソンズ, 邦訳, 下113頁.
- 5 Habermas, 2-395 (下228頁).
- 6 Habermas, 2-274-275, 400 (下107-108, 234頁).
- 7 吉田純 (2000年).
- 8 Luhmann, 1-350.

8 規格化・多様性問題とメディア論の再編成

同一テーマに対する三者 (パーソンズ・ルーマン・ハバーマス) の異なった立場がある場合、択一的選択ではなく、それぞれから何を取り入れるかという姿勢なしには、かれらの間の矛盾を越えることはできない。ここでは、総合の作業までは進めることができないが、以上の検討を踏まえた結果の覚え書き、問題領域の一覧、という形で「象徴的メディア論」の在り方をまとめて結びとしよう。

1 定義 メディアとは何か、あらためて確認しておこう。第1に、メディアは交換と相互行為の媒介をするものである。第2に、伝達手段である。「合意」部分が、メディアの中に凝縮／代置される場合も含まれ、プログラム化された、事前の意思決定という観点もありうる。第3に、ある程度以上の、持続的・一般的な交換にかかわるものに限る。これに「象徴的に」「一般化された」という要件を加えることができる。

2 メディアの技術的側面 伝達技術の特性それじたいが、たえず技術革新されていくものであるとの認識のもとに、パーソンズ系の基本メディアとは別に、メディアの技術的側

面として独立に扱っていくことが有効であろう（表3のリストとして、試案をあげた）。

3 メディアの一般化の範囲 「一般化された」というのは、三者に共通する用語であった。しかし、言語、貨幣、法が「一般化」している範囲・程度と、信頼、愛、シンボリック・パーソンが「一般化」している範囲・程度には差がある。しかし、1の上記基準にあてはまる限り、一括して扱うのがよいだろう。ハバーマスの「代置」「凝縮」だけでなく、なお、いくつかの基準を導入して扱う。

4 多様性－規格性 貨幣の場合、メディアそのものが変わるのでなく、価格（Preis）の変化が特徴的であった。市場メカニズムの自由選択は、貨幣が主役である。他方、規格化という点では、メディア間では、法がより安定したメディアの一つに数えられる。これは、ルーマンが条件プログラム、ないし、慣例プログラムと呼んだものに相当する¹。

表3 メディアの諸側面

基本的メディア

A 社会レベル

言語 言語使用のルール、ディスクール（言説、討議）

身体：ノンバーバルなジェスチャー 象徴的アイコン記号

貨幣 所有権（Eigentum）、クレジット

法（Recht）オーソリティ（Autorität）

B 対人レベル

信頼（Vertrauen）愛情（Liebe）、誠実性（Wahrhaftigkeit）

シンボリック・パーソン（Einfluß）、オピニオンリーダーや尊敬対象

技術的メディア

複製技術

印刷（版画、銅版画、活版印刷）

映画

写真

レプリカ（replica）

マスメディア（ラジオ、テレビ）

電話 携帯電話

コンピュータ、インターネット など

個別領域、具体的分野、複合形態のメディアの例

A) 芸術 様式

科学 パラダイム

道徳 善悪コード

B) メディアとしての動物園、テーマパーク

メディアとしてのオリンピック

メディアとしての自動車

メディアとしての俳句 など

（本稿の検討の過程ででてきた試案なので、詳細は、今後検討の課題として、ここでの説明は控える）。

ルーマンは、貨幣が分権的、正当権力は集権的という対照を強調しつつ、機能的権威は、機能的分化の領域別に、非人格的な専門性への信頼という分権的含みを指摘している²。このような指摘を手掛かりにして、メディア論の再構成をすすめる課題が残されている。

1 碓井(1999年)。

2 Luhmann, 邦訳, 1990年, 91-99頁。

後記 ドイツ社会学への関心を喚起いただいた、阪大での蔵内数太、森東吾の両先生、ケルン大学でのProfessor Dr.Renate Mayntzの学恩を回想しつつ、この小論を捧げたい。

参考文献

- Parsons, T., *Sociological Theory and Modern Society*, 1967.
- Parsons, T., *The System of Modern Societies*, 1971. 井門富二夫訳『近代社会の体系』1977年。
- Parsons, T., *Politics and Social Structure*, 1969. 新明正道監訳, 金沢実訳, 『政治と社会構造』上下, 誠信書房, 1974年。
- Luhmann, N., *Vertrauen*, 1973 (2. erw.Aufl.) . 大庭健・正村俊之訳『信頼—社会的な複雑性の縮減メカニズム』勁草書房, 1990年。
- Luhmann, N., *Funktionen und Folgen der formaler Organisation*. 1964. 沢谷豊ほか訳, 『公式組織の機能とその派生的問題』上下, 新泉社, 1992-1996年。
- Luhmann, N., *Soziale Systeme*, 1984. 佐藤勉監訳, 『社会システムの理論』恒星社厚生閣, 1993-1995年。
- Luhmann, N., *Gesellschaft der Gesellschaft*, 2 Bde, 1997.
- ルーマン, 佐藤 勉訳『社会システム理論の視座』木鐸社, 1985年。
- Habermas, J., *Theorie des kommunikativen Handelns*, 1981. 河上倫逸ほか訳『コミュニケーション的行為の理論』全3巻, 未来社。
- Habermas, J., *Strukturwandel der Öffentlichkeit*, 1962. 『公共性の構造転換』未来社, 1973年, 1990年(第2版)。
- Benz, Arthur, *Föderalismus als dynamisches System: Zentralisierung und Dezentralisierung im föderativen Staat*, 1985.
- Kneer, Georg und Armin Nassehi, *Niklas Luhmanns Theorie sozialer Systeme*, 1993. G.クニール, A. ナセヒ, 館野受男・池田貞夫・野崎和義訳『ルーマン社会システム理論』新泉社, 1995年。
- Naschold, Frieder., *Organisation und Demokratie*, 1969.
- 新 睦人, 社会分析図式の形成と展開, 田野崎昭夫編『パーソンズの社会理論』誠信書房, 1975年 所収。
- 碓井 崧, 組織変革と人間変革, 麻生誠・柴野昌山編集『変革期の人間形成』アカデミア出版会, 1978年, 所収(ここでは, F.Naschold の *Organisation und Demokratie*, 1969における民主的決定と負担解除の発想の紹介と検討を行っている)。
- 碓井 崧, 対抗的相補性と複合的相補性, 『金沢大学文学部論集 行動科学・哲学篇』第17号, 1997年。
- 碓井 崧, ルーマンにおける目的プログラムと条件プログラム, 『金沢大学文学部論集 行動科学・哲学篇』第19号, 1999年。
- 碓井 崧, 社会システム論, 碓井ほか編『社会学の理論』有斐閣, 2000年, 所収。
- USUI, Takashi, *Cultural Diversity or Cultural Confusion? : The Viewpoint of Decentralization and*

Network. Presentation to the Plenary Session, 33rd World Congress of IIS (International Institute of Sociology) , Cologne, Germany, 1997. E.K.Scheuch and D.Sciulli (eds.) , *Societies, Corporations, and the Nation State*, Brill, 2000, pp.244-253.

村中知子『ルーマン社会学の可能性』恒星社厚生閣, 1996年.

吉田純『インターネット空間の社会学 ― 情報ネットワーク社会と公共圏』世界思想社, 2000年.